

conneko-コネコ-

高尾芽依（環境人間学部3年）

キーワード：子ども，地域，ボランティア

1. 団体概要

conneko-コネコ-は、地域の子どもの対象としたボランティア団体と学生をつなぐことで、支援者不足の解消を図るとともに、学生の観点から、地域の居場所支援の課題を探り、現代の子どもたちが直面している課題を明らかにし、学生として可能な解決策を探ることを目的としている団体である。現在は4年生1名、3年生1名、2年生10名、1年生13名の計25名が所属している。また、本団体は、兵庫県立大学令和7年度学生生活活動支援事業”県大生チャレンジサポート”にSDGs推進部門として採択され、支援金の交付を受けることで、活動の充実および継続的な活動実施を可能とした。

2. 2025年度の活動について

現在 conneko-コネコ-は、高砂市で毎月1回、地域の子ども食堂として運営されている「きっずきっちゃん曾根」，「阿弥陀おかげ村子ども食堂」，「地域・子ども食堂よねだ」，大阪府豊中市で子どもたちを支援するイベントを開いている「ごはん処おかえり」を主な活動拠点としている。

「きっずきっちゃん曾根」では、子どもたちと一緒にUNOや鬼ごっこで遊んだり、食事をしたりした。とりわけ、子どもたちとの身体を使った外遊びについては、学生ボランティアの存在が有効に機能していると言える。また、地域のボランティアスタッフへのインタビュー調査を通じて、地域の課題について、またその対応策などについて聞くことができた。一方で、子どもたちの遊びが携帯やゲーム機による個別の遊びに閉じていることが問題となることもあり、今後、遊びの在り方について検討していく必要を感じている。

「阿弥陀おかげ村子ども食堂」では、ハロウィンパーティーの司会や、調理・後片付けの手伝いを通して、大規模支援の場での課題を捉えることができた。

「地域・子ども食堂よねだ」では、子どもや大人



写真1 きっずきっちゃん曾根



写真2 阿弥陀おかげ村子ども食



写真3 地域・子ども食堂よねだ



写真4 ごはん処おかえり

※写真3のみ学生ボランティアは写っていない。

やボランティアが全員で一緒に遊びをすることを通して、地域のニーズや地域の特徴について知ることができた。

「ごはん処おかえり」では、未成年の子どもは営業時間中に無料でごはんを食べることができ、大人であっても、困窮時には無料提供される仕組み(お福分け)があり、地域の「食」を支えている。いわゆる多世代の地域食堂として、誰もが受け入れられる場所として機能しており、地域の課題を受け止め、みんなで支え合って生きていく居場所づくりを目指している。クリスマス会の運営補助を通して、地域活動として子どもの居場所を運営することの困難について知ることができた。

3. 活動実施による影響・成果

毎月活動に参加することで、子どもたちにあだ名をつけられたり「ありがとう」「また絶対来てね」と言ってもらえたりと、とても喜んでもらえる。運営者の方からも、「子どもたちと遊んでもらえてありがたい」「手伝ってもらえて助かっている」との声聞くことができた。子ども食堂は運営の多くを高齢者ボランティアが担っているため、大学生が介入することで、子どもと大人の間にある世代間ギャ

ップを埋めることができた。

本活動を通して、子どもに関心をもつ大学生と地域で「居場所」づくりの支援を行っているボランティアをつなぐことができた。地域ボランティアに関心があったとしても、大学生ひとりで参加することは難しいが、学生団体としての参加だと、スムーズだった。ボランティアとしての活動参加を通して、座学では学ぶことのできない子どもたちの生活実践について知る機会を得たことで、具体的なイメージと共に学生ボランティアとしての関わりの在り方を検討する資料を得ることができた。これらをもとに、地域支援の現状と、子どもたちが経験している課題について考えることができ、子どもの「居場所」づくりの取り組みにみられる課題について、今後も引き続き検討を続ける。

4. 活動を通して学んだこと

ボランティア活動に継続して参加することの重要性を学んだ。地域の方々には、私たち大学生ボランティアと積極的に関わろうとしてくれた。子どもたちも、私たちが話しかけてみると、自分からたくさん話をしてくれる。このように、地域側は私たちを歓迎してくれているので、課題発見という意味でも、せっかくコミュニケーションを取って構築した関係を一度きりで終わらせるのはもったいない。何度も対面することで、地域・子どもたちから信頼できる学生と認識され、地域コミュニティの一員として受け入れられ、子どもたちの成長の後押しをすることができたと感じられた。人と接するのが苦手だった子どもも、継続して子ども食堂に参加することで、たくさんの異世代の人と関わることができ、明るくなった。参加したボランティア学生も、多くの多世代の人と関わることができ、今後社会で必要とされるコミュニケーション・スキルを高めることができる。

地域でみえてくる子どもたちの課題についても、具体的に学ぶことができた。例えば、靴底がめくれていたり、土日でも体操服を着ていたり、特に身なりから気になる子はたくさん見つけられるが、通告をすると親が警戒して子ども食堂に来なくなるため、深いところまで関わることはできない。市役所などに情報提供をするまでに留まるなど、支援の手を差し伸べる手段に課題が残る。子ども食堂は本当に困っている子が来るというイメージがあったが、特に家庭などに問題もなく遊び感覚で来ている子どもも多い。運営者によると、「困難を抱える子ども」だけを対象にすると、次第に参加しなくなる可能性があるうえ、子どもに対するレッテル貼りにつながりかねないという。そのため、誰でも参加できる場とすることで、多様な子どもたちが集まり、その中で支援が必要な子どもに自然と気づき、地域で支えていくという形が最も望ましいとされていた。現在のニーズの有無にかかわらず、隠れた社会的不安を抱えた子どもの早期発見の必要性も感じた。

5. 今後の展望

活動場所について、大学からなるべく近い姫路市内でボランティア活動ができるような拠点を増やし、メンバーが活動に参加しやすくなればより良いと考えている。

大学生ボランティアとしての参加形態について、ただの遊び相手にとどまらず、conneko-コネコ-の目指す「子どもひとりひとりに沿った支援」を可能にするために、気になる子どもについての情報をどのように共有していくことができるか、どのように連携していくことができるかなど、課題も見えてきた。そこで、ミーティングや記録の共有など団体内交流の機会を増やす。そして地域団体と話す機会を持ち、地域の子どものためのセーフティネットとして機能するための工夫や具体策について考えていきたい。